

スウェーデン便り（序章） 背中を押すもの 橋本白道（随想 倶楽部）

[発行日]=1999年7月6日

[本文]

「サバティエの便り」というものが、吉本隆明の詩「異神」にあったが、どのようなものであったのか、今はもう、すっかり忘れてしまった。

記憶の中に、何故（なぜ）か妙に、あざやかに、赤いシミのように刻まれたものは、その手紙が、もともと、宛名（あてな）のないものであった、ということだけだ。

あてどころなく、さまよい続ける手紙、のイメージは、どこか、いたましく、そして、どこまでも深く悲しい。

「悲しみの果てに、木酢酢（もくさくす）のように結晶したものを愛と名付ける」などという託宣は、ロカ岬の海深く、沈められていたはずだったが……。

さて、私の旅も、宛所のない手紙のように、またしても、さまよい続けるものなのか。一九九一年、インドのロナヴァラから帰ったあと、私は、長い旅が終わりに近づいた、と感じていた。

もう何処（どこ）へも行かないだろう。もう誰（だれ）に訊（たず）ねることもない。

ひたすら体を動かし、流れおちる汗と共に在るだけでよい、と感じていた。

旅は外へ向かわず、内側、それも、手のぬくもりや、足の裏の大地との呼応へ向かうだろう、と感じていた。

あれから、八年が過ぎた。

そして今、梅雨にけぶる木々の緑の中に、夏椿（なつづばき）の白い花を眺めている。

今日もまた、日曜日のような、のどかな朝食。小さなテラスに切り株のテーブル。ゴツゴツした自家製パンと、博多、美々（びみ）のふくよかな珈琲（コーヒー）。小さなアフリカの椅子（いす）の上には、カミさんの織りあげた、裂き織りの座布団。

あまりの美しさ故に、明日はもう聞けないかも知れない、とまで思ってしまう、ウグイスたちの声。ちょっと、ひかえめに聞こえる、ホトトギス、野バトや、たくさんの鳥たちの声。

大きな木々。たっぷり雨をふくんで、つややかな苔（こけ）の庭。様々な緑のバリエーション。

「これだけあって、他に何がいるの？」

長崎の吉岡さんの声が、私自身の呟（つぶや）きへと重なってゆく。私は、このまま、この場所で、自足の海に漂っていたい、と感じている。

だが、そのような、至福の瞬間に、時折、胸をしめつける痛みは、なんだろう。

誰か、背中を押す者がいる。

既に去った、あるいは、それ故に、強烈に現存する魂達。……フクナリさん……内海さん。

「もう、ひと仕事、してもらいたいのですが」そんな囁（ささや）きが、耳の奥に銜（こだま）している。

梅雨にけぶる木々の間に、細い蜘蛛（くも）の糸が見える。

その糸を、注意深く、たぐり寄せること、私は、そのことに、身をゆだね始めている。

（陶芸家。スウェーデンの国民大学に留学するため、今年十二日にたつ。留学は一年間。現地からの折々の記を掲載する）